

Y14b 天文現象キャンペーンの観察報告に対するサイエンス的考察の試み

佐藤幹哉、渡部潤一、石崎昌春、渡邊香理、平井明 (国立天文台)

国立天文台で取り組んできた天文現象のキャンペーンは、これまでは「流れ星を眺める」「彗星観察にチャレンジする」「水星(内惑星)を見る」など、一般層に対して実際に観察を行ってもらうこと自体を第一の目的として展開してきた。しかし回を重ねるにつれて、キャンペーンスタッフもキャンペーンへの参加層も習熟してきたことが伺える。このような状況から、「サイエンスの要素を含んだ観察結果へとつながる報告項目」を加えて、サイエンスの面から結果を考察する試みを行った。

今回の発表では、まず2007年8月に行った「皆既月食、どんな色？」キャンペーンにおける皆既月食中の月の色について、報告から得た結果とその考察について報告する。観察方法は、フランスの研究者、ダンジョン(M. A. Danjon)によって考案されたダンジョンスケールを用いて色を数値化し、また色の見本も合わせて公開して、皆既中の月の色を報告してもらうことにより行った。

また、2007年12月に「ふたご座流星群を眺めよう」キャンペーンでは、ふたご座流星群の流星出現数の推移を推測するために、これまでに行ってきた流星群観察キャンペーンから、報告項目を見直した。具体的には、観察時間や流星数の報告区分を増やし、群流星と散在流星の区別を項目に加えることで、単位時間あたりのふたご群流星数が把握できるような改善を試みた。本発表では、これらの結果を報告する。